

下村虎六郎、台中一中校長となる

野口周一

はじめに

今秋、本と読書の会編『図説 教養として知っておきたい日本の名作50選』（青春出版社、二〇一六年）という新書が出た。そこには「日本文学の金字塔50編を集め」とあり、第一章「心の葛藤や苦悩を描いた物語」、第二章「たくましく生きる姿を描いた物語」、第三章「さまざまな愛のかたちを描いた物語」から構成されている。

本稿の表題「下村虎六郎」とは、下村湖人のことであり、彼の『次郎物語』は、前掲書の第二章に「激動の日本を生き抜く少年の成長過程」というキャプションを付され、収録されている。

前掲書の作者紹介には、「一八八四～一九五五年。佐賀県に生まれる。本名は虎六郎。東京帝大在学中から『帝國文学』の編集委員となる。のちに教職に就き台北高等学校の校長も務め、その後も教育者に専念。『次郎物語』の執筆に着手したのは52歳のときで、ほかに『論語物語』『教育的反省』などがある」とある。

この紹介文に大過はない。問題点としては、湖人は台北高等学校校

長となる前に台中一中校長として台湾に渡ったのである。また彼の代表作として『次郎物語』と『論語物語』を挙げるのは通例であるが、そこに『教育的反省』を加えたのは興味深い。

昨今、人々の活字離れが焦慮をもつて語られ、多くの書肆が倒産していく中で、日本の「名作」が取り上げられた意義は大きいといえる。いずれにせよ、『次郎物語』がいまだに燦然と輝く五十編の一つであることは自明である。

本稿は、下村湖人の台湾時代の前半——台中一中校長時代のストライキ事件を中心に取り上げ、考察することを目的とする。

一、台湾渡航の経緯

下村湖人の台湾滞在は、一九二五年（大正一四）六月から一九三二年（昭和六）九月までの期間であった。それでは何故台湾に渡航したのか。その高弟・永杉喜輔は唯一の湖人伝である『下村湖人——その人と作品』（講談社、一九六四年）及び『下村湖人伝——次郎物語のモデル』（柏樹社、一九七〇年）において、「湖人に台湾行きをす

すめたのは田沢義鋪よしはらであった。そのころ台湾総督府の総務長官は後藤文夫であった。台湾の教育はむずかしく、ことに台中は民族運動の中心になっていて、台中一中の校長は誰が行ってもつとまらないといわれるほどであった。後藤文夫はそのポストをしつかりした人物を内地から得たいと、学生時代からの親友田沢義鋪に相談した。田沢は湖人を推した。後藤は湖人の兄、内田平四郎とは五高で同級であったが、その弟の湖人は、年少詩人としてその名前を学生時代に聞いただけで、まだ会ったことはなかった。後藤は『君がいいというなら、いいに決まっている。ぜひすすめてくれ』と田沢にたのんだ。こうして、湖人は、大正十四年の六月、台中第一中学校の校長に迎えられたのであった」と述べている（『下村湖人伝』／『永杉喜輔著作集』第四巻所収、国土社、一九七四年、一三四頁）。

この論旨のもとになったものは、湖人の一周忌に刊行された『一教育家の面影―下村湖人追想―』（新風土会、一九五六年）に収録されている後藤文夫の回顧談である（後掲）。

要は五高閥を根底にした人事であった。過日、筆者は宮川次郎著『台湾の人々』（拓殖通信社、一九二六年）という面白い本に出会った。同書は「台湾における人物評」という趣であり、著者自身が「私の筆端に触れた人々こそ好い迷惑であつて、云はば筆者の喰ひ物になった訳である」と述べてはいるが、同書は単なる際物ではない。そこに後藤の評価も三頁に亘って載っていて、しかも「只後藤は背景なしに憲政会内閣に登用されたのであるから、系統的進路は是れから開拓して

行かなければならぬ。そうした境遇にあるせいか、台湾では切々とクラスメント閥を作つて居ると称せられる」という真に興味深い指摘がなされている。ただ憲政会云々の個所については、後藤が総務長官に就任したときの台湾総督は伊澤多喜男であり、後藤はその配下であった（浅野豊美『帝国日本の植民地法制―法域統合と帝国秩序―』名古屋大学出版会、二〇〇八年、五三六頁）。

ここに登場する田沢義鋪は「一八八五―一九四四、官僚、政治家、青壮年団運動の指導者」であり、五高、東大と湖人の同郷の先輩であった。「一九〇九（明治四二）年東大法科卒。一〇年内務省に入り、静岡県安部郡長」、「二五（大正四年、修養団第一回天幕講習会の開催を主唱、以後毎回講師を務めた。一九年明治神宮造営への青年団の作業奉仕を提唱し、これが青年団運動隆盛の端緒となった。二二年日本青年館理事、二四年新政社を創立して政治教育運動を始め、雑誌『新政』を刊行、また二五年の大日本連合青年団の結成を指導して理事に就任」、「三四年後藤文夫の後を継いで大日本連合青年団理事長に就任、青年団運動の最高指導者となった」、「二五年新日本同盟を結成、後藤文夫らと政治教育運動を推進、二七年選挙粛清同盟会の結成を提唱し、選挙粛清運動を展開した」、「大政翼賛会にも協力したが、既成政党や政治の腐敗には一貫して批判的で、四一年には翼賛政治会への加入を断つた」とある（『現代日本』朝日人物事典『朝日新聞社、一九九〇年』）。

なお、後藤文夫（一八八四―一九八〇）については、中村宗悦著『後

「藤文夫―人格の統制から国家社会の統制へ」（日本経済評論社、二〇〇八年）という専論がある。

二、台中一中ストライキ事件

下村湖人は過去をほとんど語らない人であった。永杉喜輔（群馬大学名誉教授）は湖人の書簡百余通を持ち、敗戦後には焦土の東京で雑誌『新風土』の刊行を通じて寝食をともにしたのであったが、かく回想していた（野口周一著『生きる力をはぐくむ―永杉喜輔の教育哲学―』開文社出版、二〇〇三年、参照）。ことに台湾時代の湖人については、資料にも事欠き不明な点が多い。

さて、筆者は『次郎物語』には中学二年のときに出会い、高校一年の春には『高崎高校新聞』第七十七号「論説欄」に、湖人に学んだことを「運命と自由」と題して書くほどに傾倒していた。その後、筆者は歴史教師を生業とし、湖人の台湾時代は気になりながらも放置していた。二〇〇八年十二月、筆者は台湾日本語文学会に招聘されるといふ幸運に浴することとなり、その発表題目を「下村湖人の台湾における教育文化活動―台湾あらたま社・樋詰正治との交友を中心にして―」とした。発表終了後、質疑応答のときに銘傳大学助理教授（当時）頼衍宏氏から「『あらたま』を読むと湖人の歌や歌会の様子が具体的にわかります」、「中央研究院の張季琳女史は『次郎物語』の分析をしています」という貴重な情報を教示された。筆者は文学畑への目配り

が不十分だったことに臍を噛んだのであった。

帰国後、直ちに張季琳氏の「下村湖人の台湾経験」（二〇〇四年度財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書）所収、財団法人交流協会、二〇〇五年）なる論考を読んだ。氏の判断にやや穿ち過ぎるかなと思われる個所はあるものの、『次郎物語』等を丹念に読み込み、見事な日本語を駆使した説得力のある新見解がある。

張氏は説く。「彼の在任中、台中一中できわめて大規模で深刻なストライキ事件が起っています。下村校長はストライキに関った六十名余りの台湾人生徒を退学させるなど極めて強圧的な方法で事態を收拾した。これまで下村湖人と台中一中ストライキ事件との関りについてはなにも知られておらず、そのため従来の湖人研究者もこの事件にはほとんどなんの注意も払ってこなかったというのが実情であります。しかし、このストライキ事件は生徒であった台湾人の心に深い傷跡を遺したばかりでなく、校長であった下村湖人の魂にも暗い影を落としたはずであります」（二頁）と。

これに先立って、張氏は「楊達と沼川貞雄―台湾人プロレタリア作家と台湾公学校日本人教師―」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第三号、二〇〇〇年）において、「沼川尚氏（沼川貞雄の息子―引用者）の話によれば、失明後の沼川貞雄の日常生活ではラジオはほとんど一日中付け放しであったが、ある日たまたま『次郎物語』に関する放送を聞いて驚き、下村湖人は元の上司で、とても気むずかしく、人の話をまったく聞こうとしない人だった、と漏らしたそうであ

る」(一〇七頁)、「当時の『台湾民報』や『台中一中八十年史』所収の「台湾光復前本校校長簡介」(二七頁)と梁惠錦「台中一中抗日罷課事件」(三三五―三三七頁)などによれば、「下村校長は炊事長夫婦を庇うため、事実を無視し、罪のない学生達を犠牲にした」(註24)、(一二四頁)、「台中一中第十四期生で(一九二七年四月入学)、戦前から台湾文壇で活躍している」巫永福氏は筆者宛の書簡で以下のように述べている。『台中一中ストライキ事件は、張深切さんの話によれば、彼をはじめとする広東台湾独立運動分子の煽動による争議でした。当時の下村校長は非常に厳酷だったので、退学させられた学生が相当多く出ました。これは台湾教育史上の一大事件です』(註24)一二四―一二五頁)と記している。筆者は張氏の検証は妥当なものであると考えている。

(本章のここまでの記述は、野口周一「下村虎人とあらたま社」の第三章「下村湖人の渡台とストライキ事件」『比較文化史研究』第一号、比較文化史学云、二〇一〇年)に拠る)

後日、張氏は『台湾における下村湖人——文教官僚から作家へ——』(東方書店、二〇〇九年)を上梓され、上記の論述も収録されている。本書において、張氏のその後の研究の深化が、成果として盛り込まれている。

それでは、張氏は本書において、当該事件をどのように纏めているか、その梗概を記しておきたい(張前掲書、一一五―一一六頁)。

一九二七年(昭和二)四月末に起こった台中一中ストライキ事件は

紛糾を極め、学校が平常の状態に復したのには八月になってからであった。下村校長はひたすら厳罰主義で臨み、その結果、少なくとも四十名の台湾人生徒が退校処分を受け、彼らは二度と台中一中に戻ることはなかった。事件の発端を作った日本人炊事長と舎監は処分されたようではあるが、彼らの言動について学校側は公式に遺憾の意を表すこともなく、まして一分の非を認めて謝罪することはなかった。

下村校長は終始傲慢で強圧的な態度で台湾人生徒や父兄や記者に接したため、彼らの憤激を買い、憎悪的となり、一般台湾知識人からも厳しい非難を浴びることとなった。下村校長としては、佐賀や鹿島や唐津での自分のやり方が台中でも通用すると自負していたことであるが、台湾人の民族意識への十分な配慮を欠いていたため、下村教育は台中では全く挫折してしまった。

しかし、台中一中ストライキ事件の鎮圧は、総督府側からは下村校長の功績と見なされ、彼はこのときの手腕を買われて、翌二八年(昭和三)には台北高等学校の教授に栄転するのである。当該事件は台湾反日民族主義運動と連関していたという一面があり、総督府側官憲からすれば、この民族主義勢力との妥協はありえなかった。あらゆる妥協を排して事件に対処し、ともかくストライキ事件を収拾した下村校長は、総督府側官憲の期待に応えたわけである。事件中も総督府側から下村校長へ相当に強い圧力がかけられ、少なくとも結果からすれば、下村の方も総督府の要請に沿いながら事件を処理していったと想像される。――

三、「下村湖人全集」の問題点と日本語資料の整理

張季琳氏は上記の説をなすにあたり、当時の新聞報道（『台湾日日新報』『台湾民報』等）や『台中一中八十年史』（東芸影視事業股份有限公司、民国八四年）を読み解き、かつ当時の事情を知る諸氏に主に書簡で聞き取り調査を行った。まさに台湾側資料を渉獵したわけで、張氏の独壇場であった。

ここで『下村湖人全集』の問題点について述べたい。言うまでもなく、湖人の生涯と作品を考えるにあたり、重要な資料として『下村湖人全集』は価値がある。それ故に『下村湖人全集』の成り立ちを知る必要がある。湖人の全集は計三回出版された。第一回目は全一八巻（池田書店、一九五五年）、第二回目はその一八巻本の版を組み直して全一〇巻（池田書店、一九六五年、第三回目は未発掘資料を含め、【決定版】と銘打って出された（国土社、一九七五―七六年）。但し、この【決定版】には『冬青葉』が収録されていないという致命的欠陥がある。永杉によれば、全集が売れないので編集担当者は實際に移された、また『冬青葉』も収録することができなかった、という。その分、従来の『全集』に収録されなかった単著が入ったのであるが、台湾時代の資料収集が全くなされず、加えて日本語資料の遺漏も多い。

本『全集』編集の責任者は永杉喜輔であった。筆者は高校一年の時より永杉に私淑し、人間的には今も敬愛はしているものの、湖人の台

湾時代を重視しなかった姿勢は惜しまれてならない。考えるに、永杉を始め編集委員諸氏は文献資料を取り扱う経験に欠けていた、ということである。少なくとも、筆者が考証を旨とする東洋史学を専攻していたのであるから、筆者を利用していただきたかつと思わざるをえない。

さて、台中一中時代の湖人について言及している日本語資料としては、『台湾警察沿革史』（台湾総督府警察局、一九三九年）（復刻版）台湾社会運動史―台湾総督府警察沿革史（龍溪書舎、一九七三年）、「一教育家の面影」（前掲）収録の数編、それに加えて湖人の長女にあたる明石晴代著『次郎物語』に賭けた父・下村湖人』（読売新聞社、一九七〇年）がある。

これらは張氏も読まれているのであるが、ここで改めて読み直しておきたい。なお、『台湾警察沿革史』は張氏が引用されているので（張前掲書、七八―七九頁）、ここでは割愛する。

以下、『一教育家の面影』から順次引用し、筆者が簡単なコメントを付すことにしたい。なお、執筆者の肩書きは本書に記されているものであり、記されていないものはそのままにしておいた。

(1) 後藤文夫「下村さんを偲ぶ」（参議院議員・元内相）

私が台湾の総務長官時代、「だれかい校長を得たい。君の知っている人で、しっかりした人はいないか」と田沢君に相談したの

です。すると、「佐賀県の中学校長をしている内田平四郎君の弟さんがいいと思うけれども行ってくれるかしら」という話なので、「君がいいというならいいにきまつているから、ぜひ勧めてくれ」ということで、下村さんが台湾に来て下さることになったのです。台中の中学校長に来てもらったのですが、台中は領台以来なかなかむずかしいところで、台湾の自治運動とか、あるいは台湾独立運動などは台中が中心で行われておつて、気象のはげしい、また戦亂的な空気も強いところなのです。従つて中学校もなかなかやかましい学校で、ストライキなどもたびたびあり、どんな校長が行つてもうまく行かない。そういうところだったので、その台中の中学校では、多分何も事件は起らなかったと思います。私はその後一年半ばかりで内地の方に帰りましたから、その後のことは詳しく存じませんが、台湾の教育界では非常に令名をばせ、隠然とした動きをなしておられました。

日本が台湾の植民地統治を始めて以降、台中は日本にとって統治の難しい地であつたといわれる。加えて台中一中の設立事情も知る必要がある。ここで必読の文献は、若林正文「総督政治と台湾土着地主資産階級——公立台中中学校設立問題、一九二二—一九二五年——」（『台湾抗日運動史研究〈増補版〉』所収、研文出版、二〇〇一年）であり、その冒頭に「一九二五年五月一日、日本統治下台湾中部の新興の町台中に公立台中中学校が開校し、この日第一期生一〇〇名が入学した。

この中学校はすこしかわつていた。入学した生徒が、植民地の被支配民族の立場にあつた漢族系住民（以下時に応じて台湾人も称す）子弟ばかりであり、当時は、植民地の中等教育機関で日本本国（内地）と称された」と同じ『中学校』の名称のものは、在留日本人子弟向のものは別として、朝鮮にもなかつたからである。朝鮮人子弟向の中等教育機関は高等普通学校と称し、四年制で入学資格、教科内容とも『内地』の中学校よりは程度をおとしてあり、もちろん日本本国の学制との連絡もなかつた。「この公立台中中学校は、元来、当時の台湾の、差別的な日本人子弟向とは別立ての、不十分な植民地教育体制下の子女の将来を憂えた台湾人の上層階級の人士が、一九二二年頃より始めた台湾人子弟向私立中学校設立運動に端を發して設立されたものであつた」とある（三三七頁）。要するに、台中一中とは台湾人生徒が大多数を占める中学校であつた。

湖人が着任した当時の台中について、明石前掲書は後藤の記述に依拠し、「本島人（台湾の人）の子弟が大部分を占めていたため、もっともやりにくい学校として敬遠され、それまで、同学校長の更迭が総督府の頭痛の種となつていたのである。それほどの学校へ、内地からいきなり飛び込んできた父の苦労は、なみたいていのものだけはなかつた」と述べている（八四頁）。

しかし、総督府の総務長官であつた後藤が台中一中の事件を全く知らなかつたとは、どういふことだろうか。後藤がその地位にあつたのは、一九二四年（大正一三）九月から二八年（昭和三）六月までのこ

とであり、湖人の校長在任期間と問題なくかさなる。

その理由を考えると、一つには『一教育家の面影』は教育者としての湖人を顕彰するものであるから、その経歴に瑕をつけるような文章はなさない、ということかもしれない。それ以上に、筆者は「一視同仁の内地延長主義」（中村前掲書、八一頁）上の処断であったとして、後藤はストライキ事件の顛末に何等の疑義も持たなかったと考える。

なお日本の領台直後、その同化政策に反対した人物に新渡戸稲造がいる（石井智子「新渡戸稲造の台湾認識をめぐって」『比較文化学』の地平を拓く』所収、開文社出版、二〇一四年、参照。）

(2) 樋口孝「ストライキ頻発」

思い起すも古い事ながら、台湾の学校長仲間で当時の出来事が、一番強く思い出されるのです。それは下村さんが台中一中校長のとき、寄宿舎内に起った不可思議なストライキ事件です。校長自ら舎監室に泊りこんで原因を調査したが、どうしてもその真相がつかめなかった。その筈、この後押しは広東にあった。曾て一中生徒の修学旅行の際、広東の大清会社に宿泊した時、先方の学生に台湾に帰ったら、ストライキを実行すべく強迫されて来たのであるが、どうしても生徒等は断行出来なかった。ところが張某等数人が広東から渡台して来て、直接指導して始めた。この事件の発端に、広東領事より台湾文教局に警報されておつたのに、なぜか

台中一中校長には知らせてなかった。後でその事が判明し、下村校長は大いに憤慨された。当時私は嘉義農林校長であったが、やはり台中一中のストライキの余波を蒙って、寄宿舎内混乱を来しておつた同じ悩みを受けたので、深く印象づけられているのです。

ストライキの発端について、明石前掲書はこの樋口の記述に拠っている（八七頁）。また「不可思議なストライキ事件」については、張氏が真相を明らかにしている。即ち、台中一中寄宿舎の日本人炊事長排斥運動であった。

文中の「張某」とは張氏の説く「張深切」のことであり、当時の樋口もその名を耳にしていたことがわかる。

(3) 蓮沼門三「追慕」（修養団主幹）

先生は、大正十四年、四十一才の時台湾に渡り、台中第一中学校長に就任せらるるや、台湾青年の指導には、道義心の覚醒、隣人愛の発揚、勤労精神の涵養の必要なることを痛感され、しかもこれは実践によつて行動的に指導せねばならぬと、さきに佐賀県鹿島中学校長時代に体験せられた修養団運動を採用されました。かくて先生は、台中の青年層乃至有識者によびかけて、台中修養団を結成し、台中公園を修練の場所と定めて、朝起床操美化清掃作業等を魁けて実施されたのであります。先生はいつも白衣鉢巻

の姿で夫人家族を伴って出席せられ、率先躬行範を示されました。美化作業の実施に当っては、先生と夫人とが、公衆便所の清掃を担当されるのが常例でした。

かくして中部台湾の修養団は、先生の努力によって、次第に発達し社会浄化の上に大きな働きをするに至ったので、私は毎年一回は必ず台湾に参りましたが、その都度先生と歓談したのであります。

ここには湖人の教育実践の一端が、修養団との関わりで述べられている。湖人の長女・晴代は、「つねづね台湾の若い人たちの指導には、道義心の覚醒、隣人愛の発揚、勤労精神の涵養などの必要を痛感していた父は、蓮沼門三氏の渡台されたのを機縁に、青年や有識者に呼びかけて修養団を結成し、台中公園を修練の場として、国民体操や清掃奉仕作業などの活動を始めていた。つとめて母や私たちも参加するようにはしていたが、早朝のことなのでいささかつらい時もあった。しかし父は、特別の事情でもない限り必ず出席し、すすんで公園の手洗いなどの清掃を引き受けていた。これには家中のものも驚いてしまった」と活写している。この記録の前段は後藤の記述をそのまま転記したものであるが、後段は身内の記述であり興味深い（明石前掲書、一〇七頁）。

後年、永杉が湖人の便所掃除に脱帽する淵源はここにある。煩を厭わず引用しておこう。永杉は京都帝国大学卒業後、大日本連合青年団

の社会教育研究生となった。その指導主任が湖人であった。永杉は「研究生とは名ばかりで、農村青年三十名とともに青年団講習所（『次郎物語』第五部に出ている「友愛塾」）に放り込まれて、最初に研究（？）させられたのが便所掃除であった。小金井の寒い早朝、便所のキンカクシを手をエビのようにしてふいた。こんな格好は親に見せたくないと思った。他の便所でゴソゴソ音がするので、こっそり戸の節穴からぞいてみたら、下村先生が大便所の便器の裏まで腕をまくり上げて磨きあげている。やらざるをえなかった」と述べている（野口周一『生きる力をはぐくむ—永杉喜輔の教育哲学—』開文社出版、二〇〇三年、二四頁）。

(4) 辻吉太郎「英姿颯爽」（佐賀県人事委員）

確か、大正十年頃と思うが、私が唐津中学の一年生の頃、校長排斥の同盟休校事件が起り、その校長は他に転任し、首謀者たる生徒若干名がそれぞれ処分された。かなり世間を騒がした事件であったので、その後任者の人選には、県当局も相当頭を悩ました事と思う。

下村校長はその重責を負うて着任された。生徒一同を講堂に集めて、初訓示されたときの英姿が、今尚眼前に彷彿とする。訓示の内容の詳細は今記憶にないが、舌端火を吐く熱弁を以って、生徒を可成りきつく戒められた。先生の気魄に、生徒一同肅然と頭

を垂れた。

(5) 辻喜代治

私が唐津中学の三年、大正十一年の夏、校長排斥運動が、ストライキに発展し、その校長は他校へ転任され、生徒達の謂う「虎」下村虎六郎先生が新校長として着任された。下村先生はその前、唐津中学の教頭であり、それから鹿島中学の校長に赴任されたので、上級生は既に「虎」の畏名を知っていた。ストライキの昂奮未だ消えやらず「虎」校長を迎えた日の空気が必ずしも穏やかではなかった。就任式場に下村先生が現れるや、講堂中の生徒達は一齐に床を踏み鳴らし騒然としてこれを迎えた。壇上に身を運ばれた先生の開口一番の声は室内の騒音のため、聞きとれなかった。何秒かの後やや静まった瞬間『騒がしい』と云うとてつもない大きな声が先生の口から飛出した。思いも奇らぬ鋭い、まさに腸を刺される様な一声であった。鶴の一声と云うのはこの事かと思われた。生徒達が思わずハッと息を凝らした瞬間、先生はあのように透る声で、静かに就任の挨拶を述べられた。勝負はその一瞬に決まった。爾来大正十四年、今度は生徒達の留任嘆願の声を静かに抑えて台湾の新天地に赴かれるまで、我等の下村校長は名実共に唐津中学の黄金時代とも謂うべき三年間を生徒達の心からの尊敬と思慕とを一身に集められたのである。

(4)と(5)は同時期のものである。唐津中学校における湖人の「名校長」ぶりが描かれている。張氏は「一言で言うならば、明治四四年から大正一四年まで一二年に及ぶ湖人の佐賀・鹿島・唐津時代は、彼が公立学校における教育者として充分に手腕を発揮し、教育的配慮と一種の気迫によって多くの生徒を感化し、また彼らから慕われ、教師から信頼された時代であった」と述べている（張前掲書、二二頁）。まさにその通りであった。

なお下村校長（大正二一〜一四年）の前の校長は小林武三（大正一〇〜一一年）といい、その在職中に校友会機関誌『鶴聲』が創刊された（『創立二〇〇周年記念誌』、佐賀県立唐津東高等学校、一九九九年）。

(6) 門脇惇「捨石の教育」（東京国税局協議団副本部長）

台北高校教授に転ぜられるまで、先生は台中第一中学校校長として、数年間を地味な台湾人子弟の教育に尽瘁しておられた。その頃台中では、一中は、歴史が古く、台湾人ばかりを収容しており、漸く、その二三年前から、総督府の方針で、いわゆる内台共学と称して日本内地人も、極めて僅かではあるが、毎年入学するようになりつつあった。

教育に対して、極めて地味で、真面目な、そして信念を持って

おられた先生は、大きな夢と希望を抱いて、あえて異民族の教育に打ち込んでおられたのであったが、その台湾も、今次敗戦の結果、日本から離れてしまい、先生のこの努力は、現在では、教え子達の消息すらわからない捨石になってしまった。

第二中学は、大正十一年に新設され、一中とは逆に日本内地人の子弟を入学させ、極めて少数の台湾人が共学を許されつつあり、当時私はこの二中の生徒だった。

(中略)

昭和二年の三月、台中二中の卒業式に、下村校長が来賓として来られ、祝辞を述べられた。これが、先生の警咳に接したさいしょである。当時、私は四年生であったが、先生の祝辞は、全く、それまでに私の聞いたことのない名演説であった。私は、その時の先生の口調を、今でも忘れることができない。曰く、「落第生が級友から嘲笑された。感奮興起して首席になった。それもよろしい。貧乏人が金持から侮辱を受けた。感奮興起して金持になった。それもよろしい」と、全くの名口調で「諸君、巣立ち行く諸君、感奮興起して大成せよ」という結びだった。

門脇のいう「捨石の教育」から、筆者が直ちに想起したことは、『次郎物語』第五部において友愛塾が軍部の圧力により、まさに閉鎖されんとしたときの次郎と朝倉先生の問答である。次郎の問いに朝倉先生は答える。次に四例をあげる(野口周一「永杉喜輔論」『群馬・地域

文化の諸相』所収、日本経済評論社、一九九二年、三二八―三二九頁)。

「なるほど友愛塾の精神は、今の時代では一種の反抗精神だといえるね。しかし、田沼先生も私も、大衆青年を反抗の精神にかり立てるつもりは毛頭ない。私たちが大衆青年に求めているのは、まず何よりも愛情だよ。愛情に出発した創造と調和の精神だよ」

「やはり時勢には勝てないよ。今は無益な摩擦の原因を作るより、なごやかな愛情を育てるために、できるだけ的手段を講ずべきだね」

「時代に流されながらも愛情だけは大切に育てていくことを忘れない点で、ただやたらに叱咤激励する連中とは根本的にちがっているよ」

「愛情はあらゆる運命をこえて生きる。それは破滅の悲劇にたえて行く力でもあり、破滅の後の再建を可能にする力でもあるんだ。人間の社会では、愛情だけがほんとうの力なんだよ。それさえあれば無からでも出発できるし、反対に、それがなくては、あらゆる好条件がかえって破滅の原因にさえなるんだ」――

「捨石の教育」とは何か。それが筆者の下村湖人論の課題である。

四、台湾の学校風景

明石晴代の記録は、父への思慕の念と情愛に溢れる佳作である。それにも拘らず、台湾の教育的風景ともいうべきものが垣間見える。そのうち二点をここでは挙げておきたい。

ひとつは、台中一中の校長官舎について。晴代は「植民地政策の常だったのでもあろうが、当時の内地人は、台湾の人たちにやたらに威圧的で、すべてが官僚的に片づけられていた。私たちの住んだ一中の校長官舎も、明らかにその現れのひとつで、必要以上に階級を意識し、誇示的だったように思われる。台中公園のすぐ裏手にある中学の官舎は、先生方の席次順ともとれる状態で、一ブロックをなして立ち並んでおり、その一角に建つ校長の住宅は、いかにも台湾らしい赤レンガの塀に囲まれて、いかめしく、ゆったりと建てられていた。広びろとした敷き地は、裏庭、畑などいくつか区切られており、座敷から見える庭には、日本ふうの築山や睡蓮を浮かべた池があり、その南端から伸びる細い流れに沿って、十数本一列に植え込まれた猩々木（ポインセチア、花のように見えるのは葉の変形）が、人の背だけより高く伸びていて、その頂上ごとに燃えるような鮮紅色の花弁をつけていた。そして裏庭では、バナナやパイヤが次つきと実ののだった」とその威容を描いている（明石前掲書、八七―八八頁）。

二つ目は、ご真影下賜の件である。ご真影といえば、筆者は壺井栄

著『二十四の瞳』を思い起こす。岬の分校に着任した大石先生は「天皇陛下はどこにいらつしやいますか」と問い、新入生の仁太君から「天皇陛下はおし入れの中におります」という答えに、先生は涙を出して笑った。——つまり奉安殿のない岬の分校では、天皇陛下の写真をおし入れに鍵をかけてしまつてあつたのだ（野口周一「保育系学科における近現代史学習の一斑」『総合歴史教育』第四八号、総合歴史教育研究会、二〇一三年、参照）。

さて、晴代は「当日の朝、父は文字どおり齋戒沐浴して、白い詰襟の官服に金モールのついた肩章、白手袋と短剣を片手に、きびしい表情で玄関に降り立つた。それはまるで、海軍士官のいくさの門出ともまごうほどのいかめしさで雰囲気であつた。俣夫もまた、母の心づかいによる新調の夏服に身を固め、平常とは別人のように清々と引き締まつた顔つきで棍棒を握っていた」、「嚴重に包装されたご真影を、台中駅頭で受け継いだ父は、万一をおもんばかつて肩から純白の布を回してこれを保ち、幌を取り払つた俣上に端然と捧げ持つたままの姿勢で、全員純白の夏服をつけた職員、生徒の列を後ろに従え、照りつける真夏の埃道をしすしすと、学校までの息詰まるような行進をつづけねばならなかつた。それは白一色の、一時間余にわたる異様なパレードであつた」と記す（明石前掲書、九〇頁）。

その状況が髪髯とする記録であるが、晴代もまた「異様」とその思いを表出させていくほどの記憶であつたことが重要である。

おわりに

下村湖人は渡台して台中一中校長となるが、親友であり盟友である田沢義輔とその背後の後藤丈夫の期待に、湖人はまさに押し潰されようとしていた、と筆者は考える。それが台中一中の教師であった沼川貞雄には「とても気むずかしく、人の話をまったく聞こうとしない人だった」と映ったのであろう。そうでなくとも、娘の明石晴代でさえも「外面の悪い父の第一印象は、まったく窮屈で陰気で、パツとしないものであった」と記し、

「旦那様は、おうちの中では私どもにまで冗談などをおっしゃって、ほんとうにおやさしい方でございますのに、そとでお見かけすると、どうしてあんなに、こわく思われるのございませう。まるで別の方のようで、不思議でなりません」とばあやが、ふと真剣な顔で言い出して、産褥の母を吹き出させてしまったこともあった。「おまわりさん」と聞いただけでも震えだすほど警官ぎらいのばあやには、官服を着てむっと口を結んだ父の姿が、あたかも大きらいなおまわりさんに見えていたのでもあろうか。(明石前掲書、一二六頁)

という話までも披露しているのである。

さて、張季琳氏は、ストライキ事件に関わる湖人の対応について、「六十名余りの台湾人生徒を退学させるなど極めて強圧的な方法で事

態を收拾した」と述べ、「生徒であった台湾人の心に深い傷跡を遺した」と断じたのである。その「六十名」については、後に「少なくとも四〇名」「三〇名以上にものぼる」としている(張前掲書、一二六頁へ既出、二四八頁)。

筆者は張氏の見解を、事実において否定するものではないし、氏が湖人の立場を擁護する論者の意見も進んで取り上げ、温かい眼差しを注いでいることは十分に承知している。

しかし、藤井省三氏は「戦前の帝国主義体制下の日本で、植民地統治の人的過ちを告発するのは、教育家下村には荷が重すぎたのであろう」(「植民地台湾における下村湖人」張前掲書所収、Ⅷ頁)と言い、張氏も「台中一中事件とは本質的には下村教育の挫折であり、この挫折感の後年まで彼の心の癒しがたい傷となったのである」(張前掲書、一一六頁)と述べるのであるが、湖人が帝国主義のお先棒を担いだという定型化された解釈に立脚するだけであれば、その本質を見極めることはできない、と考える。

そこで筆者の立場から二点ほどきさやかな疑義を呈したい。張氏が当該事件に関して、湖人が台湾人生徒に「厳酷」な処置をなしたことについて、台湾人である張氏が憤られていることは容易に理解しうる。司馬遼太郎の言を借りれば、「人間は、自尊心で生きている。他の郷国を植民地にするということは、その地で生きているひとびとの一から個々の、そして子孫にいたるまでの——存在としての誇りの背骨を石で砕くようなものである」となる(『台湾紀行』朝日新聞社、

一九九七年、三三三頁）。これは湖人も十分に承知していたことであろう。しかし、そのことこそが「植民地という教育現場と国家権力がより強固に結びついた場においては、自分が信ずる理想を語ることはできないと痛感したのではあるまいか」（張前掲書、二四六頁）に繋がるわけである。

また「彼が皇室の存在を是認したこと、左翼思想や共産主義を峻拒したこと、軍備の必要を認めたことがわかる」（張前掲書、二五〇―二五一頁）と述べていることは、湖人においては変わることのない信条であった。さらに、渡部治氏が「湖人は決して体制の否定者ではない。むしろ純朴すぎるほどの体制の肯定者であり、『皇国』の繁栄を心より願う人間であった」、「しかし、国への愛情の根本は人間としての自然の情のなかにある。狂熱的なものとは無縁のものである。穏やかな自然の情こそ国家を支える人間の基本とみるのである」という見解を示されたことも紹介しておきたい（『次郎物語』と下村湖人の思想』『国際経営・文化研究』第二巻第一号、淑徳大学国際コミュニケーション学会、二〇一六年）。

下村湖人研究においては、右記のことを大前提として、筆者もまた湖人が作品の中でその「傷」をどのように克服していったか、それを論証することが当面の課題である。その点からも張氏の労作の意義を否定するものではない。

硬骨の俳人・齋藤慎爾氏は『次郎物語』を誰か書き継ぐ人はいないか。しかし軍部と右翼にも屈しなかったのが自由主義者湖人だ。『日

の丸』『君が代』に拝跪するばかりの昨今の教育者には望むべくもない」と述べる（『大衆小説・文庫〈解説〉名作選』メタローグ、二〇〇四年、二八頁）。氏の言は推測に基づくものではあるが、氏の透徹した感性による直感でもある。換言すれば、筆者はこの言を論証することをも課題としたい。

なお、湖人は台中一中校歌「南の柱」を作詞しているのであるが、これは別稿で論じる予定である。

（のぐち しゅういち・高崎経済大学地域政策学部非常勤講師）

【付記】千葉貢先生とは、本学附属産業研究所におけるプロジェクトで、筆者はご一緒させていただき、『群馬・地域文化の諸相』（一九九二年）、『群馬にみる 人・自然・思想』（一九九五年）、『近代群馬の民衆思想』（二〇〇四年）の三冊が実を結ぶ間、先生にご教導いただきました。先生は青少年時代に下村湖人の『次郎物語』や山本有三の『路傍の石』を愛読され、かつ影響されたことをお話しくださり、筆者の研究をそれとなく激励してくださったことを感謝申し上げます。

ここに先生のさらなるご健勝をお祈りしつつ擲筆いたします。